『観る街』から『創る街』へ

～アーティストを呼びこみ、Art Sky Way を中心としたまちづくり～

兵庫県立美術館をはじめ、数多くの文化・芸術施設が点在する神戸・ミュージアムロード。この道は、これまで「アートを鑑賞するための道」として、多くの人々を迎え入れてきた。しかしその一方で、作品が生まれる過程や、創り手が日常的に活動する姿は、街の中からは見られなかった。

本提案は、ミュージアムロードを「アートを見る道」から、「アートを創り、育て、発信する道」へと進化させる試みである。鑑賞のために点在していた文化施設同士を、創作・展示・交流という連続した体験によって結び直し、街全体をひとつのミュージアムとして再構築する。その核となるのが、空中回廊 「ART SKY WAY」 である。SKY WAY は単なる移動のための通路ではなく、制作の気配が滲み出し、作品が展示され、人が立ち止まり、語らいが生まれる創造の中心となるである。

この帯が街を南北に貫くことで、人の流れが生まれ、制作・展示・鑑賞・交流が日常の中で自然に重なり合っていく。やがてこの道には、世界中から若いアーティストが集い、滞在し、創作を行うようになる。国際都市・神戸が持つ開放性と多様性のもとで、国籍やジャンルを越えた出会いが連鎖し、新たな表現や文化がこの街から生まれていく。震災を経験し、一度は華やかさを失った神戸にとって、本提案は単なる空間整備ではなく、文化による再生の物語である。

この道から作品が生まれ、この道で人が育ち、やがてこの道で生まれたアートが、美術館へ、そして世界へと広がっていく。創造の力が街に活気をもたらし、人と人、場所と場所を結び直す。ミュージアムロードは、再び神戸の新しい顔となり、未来へと街を押し出す創造都市の背骨として進化していく。

美術作品が点在する ART SKY WAY は、ミュージアムロード周辺に集積する文化芸術施設同士、そして芸術作品と人々をつなぐ媒介装置として機能する。展示される作品の多くは、この街に呼び込まれる若手アーティストや海外アーティストによるものであり、SKY WAY 自体が開かれた発表の場となる。

さらに、既存の文化施設との連携展示によって鑑賞体験を街全体へと広げるとともに、震災に関するアートの展示を通して、神戸にとっての歴史的転換点を次世代へ伝え、復興を乗り越えていくメッセージを内包する。

連続して現れる美術作品は人々の好奇心を刺激し、日常の風景に溶け込みながら、周辺の美術館や文化施設へと人の流れを自然に導いていく。

交流と滞留は、街の表情を明るくし、人々のウェルビーイングも支える重要な要素である。本提案では、交通量が多く、多様な人々が行き交う灘駅から岩屋駅までの区間に SKY WAY を重ねることで、街を立体的に浮かび上がらせ、新たな都市の居場所を創出する。

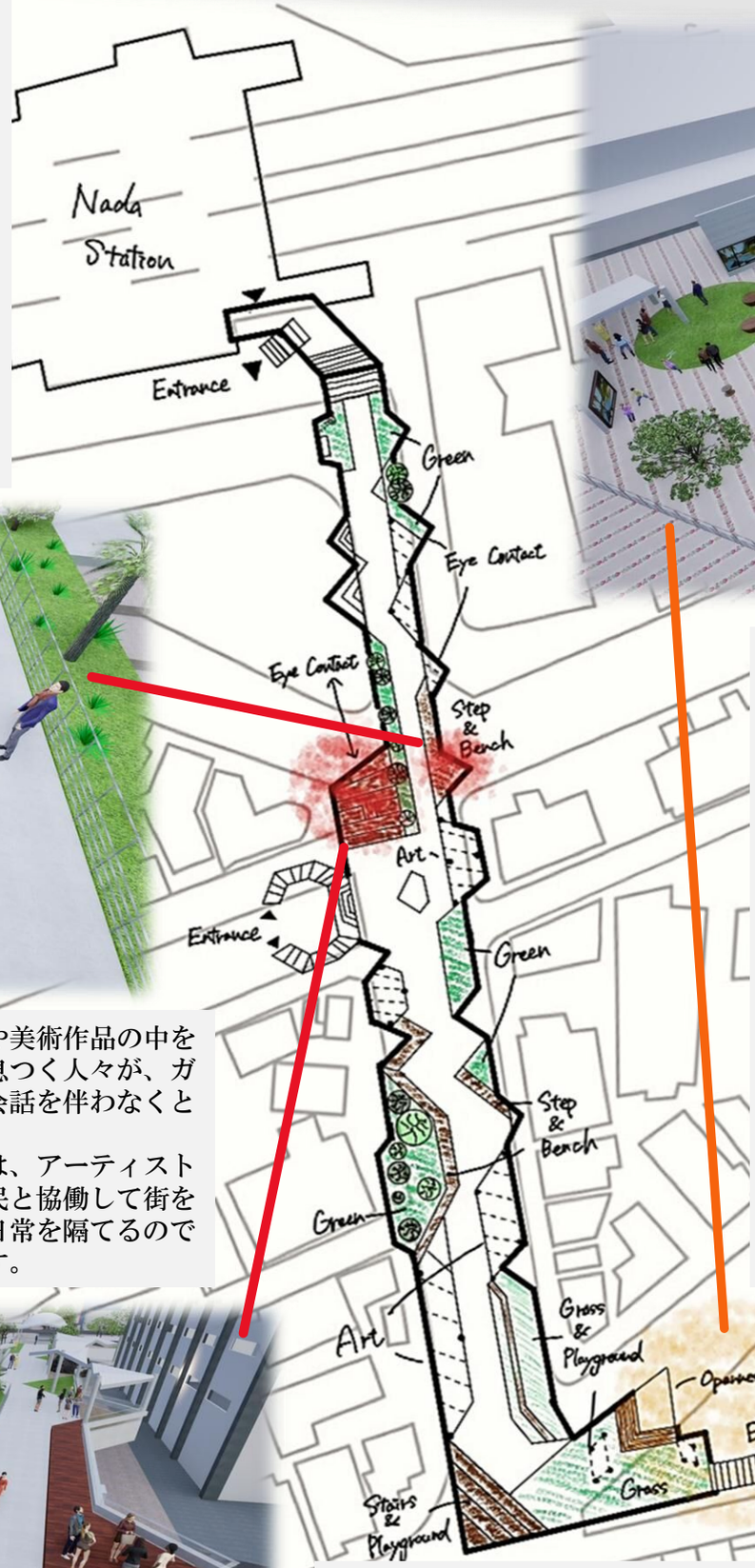
地上で不足していた自然の余地を空中で広げることによる、日常的な自然に触れ合う機会の増加と、それらと共存するベンチや芝生エリアでは、人々が立ち止まり、滞在する余白を設ける。こうした新しい日常の風景では、年齢や立場を越えた多様な人々の交流が生まれ、町全体の活気と明るさに繋がる。

神戸の中心に近い立地でありながら、山と海と空に囲まれた地形と呼応し、都市と自然が溶け合う中で、人々が語り合い、支え合う日常風景を生み出す。

視線の交差は、都市における最も原初的なコミュニケーションである。言葉を交わさずとも、互いの存在や気配を感じ取ることは、安全性を高めると同時に、街の中に安心感と連帯感を生み出す。SKY WAY 上に設けられた視線の交差ポイントは、行き交う人々が自然に互いを認識し合うことで、つかず離れずの距離感を保った緩やかなコミュニティを育てていく。

深い関係性を求めるのではなく、常の雰囲気や人の表情をなんとなく共有することが、ミュージアムロードに見えない絆を蓄積していく。

三角形状に張り出した SKY WAY の一部空間では、地上と上空、通過と滞留の視線が交差する。高低差を活かした構成により、住民同士の相互認知が促されると同時に、街の営みが感じられる風景が生まれる。



発信の場として、ミュージアムロードの中心に位置する岩屋駅前のスペースを再構築する。

この場所では、土日を中心にコンスタントなイベントを開催し、日常的にアートと人が出会う風景をつくり出す。アーティストが自ら制作した作品を販売するマーケット、地域住民が参加するフリーマーケット、さらには地域産業と連携した日本酒や、Jazz、自然といったテーマ型イベントなど、内容は固定せず、街の状況や季節に応じて柔軟に展開する。装飾や空間演出には、呼び込まれたアーティスト自身が関わり、アートと地元文化が交わる風景を生み出す。

岩屋駅前は、地域住民にとっては身近な集いの場として、同時に、街の魅力を外へと発信する開かれた舞台として機能する。

さらに、年に一度「NADA ART FES」を開催する。ミュージアムロードを横断的に使い、街を歩くこと自体がイベントとなる、より外に開かれた大規模なアートフェスティバルである。文化施設、公共空間、SKY WAY が連動し、来訪者は展示やパフォーマンスを巡りながら、日常の街並みの中に溶け込んだアートと出会う。

こうした日常的な発信と非日常の祝祭が重なり合うことで、岩屋駅前は単なる駅前広場ではなく、創る街・神戸の姿を内外に伝える象徴的な場所へと変化していく。

特に、灘駅南口広場に面したスポットでは、駅前の自然や美術作品の中を行き交う人々と、SKY WAY 上の階段状の休憩スペースで一息つく人々が、ガラス越しに互いの存在を感じ合う。この視線の重なりが、会話を伴わなくとも、新しい都市コミュニティを醸成する。

このような視線の交差によって育まれる緩やかな関係性は、アーティストや観光客、海外からのゲストを迎え入れるうえで、地域住民と協働して街をつくっていくための重要な土壌となる。内と外、日常と非日常を隔てるのではなく、互いを尊重しながら共存する、新しい街を創り出す。

岩屋駅前のスペースは、灘駅前から連続してきた ART SKY WAY の終着点かつ始発点として位置づけられる。ここでは、吹き抜け空間を設けることで、駅前に広がる開放性を最大限に引き出すとともに、既存モニュメントの松本勉《風舞》との共生関係を意識した空間構成とした。吹き抜けを囲うように配置された SKY WAY 上の広場は芝生とし、地上の喧騒から少し距離を取った、住民のための憩いの場として機能する。さらに、地上の岩屋駅前にも円形の芝生空間を設けることで、SKY WAY 上の芝生と視覚的・空間的につながりを持たせ、上下に連続する立体的な公共空間を形成する。

ART SKY WAY のデザインは、簡潔でスタイリッシュな意匠を基調とし、再整備された灘駅南口広場の空間的な拡張として機能する。美術展示スポットの屋根には南口広場と同一のデザインを採用し、連続性のある都市景観を形成する。自然やアートが点在する構成は、南口広場における「憩いと鑑賞が共存する空間」の考え方を継承し、SKY WAY 上へと発展させたものである。

灘 駅北口広場は、南口広場のスタイリッシュでシャープな印象に対し、あえてコントラストを生み出す空間として計画した。直線的なデザインが続く南口に対し、北口では「丸」を基調とした屋根や花壇を配置し、やわらかく包み込むような広場の風景をつくり出す。

屋根は、桜をはじめとする樹木を活かしながら設け、木陰と呼応するように、人々が自然と立ち止まり、休息できる日陰のスポットを点在させる。人工物で覆うのではなく、自然の存在感を引き立てる最小限の構えとすることで、駅前に穏やかな時間が流れる場所を演出する。

また、円形の花壇は、中央に植生やアート作品を点在させ、その周囲にベンチを巡らせる構成とした。自然やアートに近しい距離で腰を下ろすことができるこの空間は、通過するだけの駅前ではなく、人々が集い、過ごし、語らう憩いの広場として機能する。

将 来、この街はミュージアムロードを中心に、日本一のアートシティとなる。

現在のミュージアムロードは、文化施設が点在する一方で、美術館同士のつながりや人々の交流が弱く、震災以降、街の華やかさや文化的な一体感が失われつつある。本提案では、この状況を起点として、時間をかけて成熟していく創造都市のプロセスを描く。

10 Years｜創造が循環しはじめる段階
10年後、ミュージアムロードは、イベントやSKY WAY を介した人の流れによって、交流が日常的に生まれる街へと変化している。週末イベントやアートフェスの定着により街のブランド力が高まり、若手アーティストが集まり、暮らし、創作を続ける生活基盤が確立される。同時に、アトリエやギャラリー、屋外展示などの制作・展示インフラが整い、アートが一時的な催しではなく、街の中で循環する産業システムとして機能し始める。人々の交流が活性化し、「創る人」「見る人」「支える人」が混ざり合う都市の姿が現れる。

20 Years｜世界へひらかれた創造都市へ
20年後、ミュージアムロードは、国内外から人が集まる世界的なアート拠点へと成長する。国際的なアートイベントが開催され、海外アーティストが定住・滞在する持続可能なコミュニティが形成される。

ここで育った若手アーティストは、世界へと羽ばたきながらも、再び街に戻り、新たな創造を生み出していく。その集積の先には、ミュージアムロード発の新しい美術館の誕生という、街の文化を象徴する次のステージが見えてくる。

住 環境の整備を基盤に、アーティストに呼び込む。アートシティとして成長していくためには、アーティストがこの街で暮らし、創作を続けられる環境を整えることが不可欠である。本提案では、灘駅周辺および駅北口エリアを中心に、アーティストが長期的に滞在できる住環境を段階的に整備する。

灘駅回りに暮らしの拠点を集約することで、制作・展示・交流へのアクセスを日常の延長として成立させる。空き地や既存建物を活用し、1階をアートスペース、上階を住宅とする複合型住居の整備と住宅補助を組み合わせ、アーティストが住み続けられる仕組みを整える。また、国際都市・神戸の特性を活かし、海外からのアーティストを受け入れるための生活支援体制を充実させる。英語対応の窓口やワンストップ相談体制を整え、海外アーティストにとっても「暮らしやすい街」を実現する。
駅回りを中心とした住環境の整備により、ミュージアムロードは、暮らしから創造が生まれ、次の文化を育てる街へと進化する。

〈ロードマップ〉

関西No.１ のアートシティ
～創る人が暮らし、働き、交流する街へ～

日本No.１ のアートシティ
～世界中から人が集まり、発信する街へ～

Now
交流の減少
震災による華やかさの喪失
各美術館の孤立

10 Years
イベントによるブランド力向上
若手が集まる生活基盤の確立
人々の交流が活発に
制作・展示インフラの確立
アート産業システムの確立

20 Years
世界的なアートイベント開催
海外アーティストが定住・滞在する
持続可能なコミュニティの形成
灘のアーティストが世界へ
地域発の新美術館の建設

街 を再活性化するために、アートを軸に人々の居場所と交流を生む。

かつて小さな個人商店が立ち並び、人々の生活に寄り添うにぎわいを生んでいた灘駅北口の通り。

本提案では、このエリアをアートを軸とした新しい商店街として再生する。空き店舗や空き家が目立つ沿道の1階部分には、オープンギャラリーやオープンアトリエを整備し、アーティストが制作する場であると同時に、制作の過程が街に開かれた空間として再構成する。閉じた施設ではなく、日常の動線の中で自然にアートと出会えることで、地域と創作活動がゆるやかにつながっていく。
さらに、土日にはこの道を歩行者天国として開放し、簡易的な机や椅子を配置することで、滞留と交流が生まれる余白をつくり出す。
通学路として日常的に利用する学生や、王子公園・王子動物園を訪れる人々が立ち寄り、再び人の流れと賑わいが戻ってくることを目指す。

飲食店の誘致により、アーティストと地域住民、来訪者が自然に交わる場を育てる。制作・鑑賞・飲食が重なり合うことで、この道は単なる通過空間ではなく、人が過ごし、語らい、関係が育つ場所へと変化していく。

デザイン面では、路上の段差を階段状に整え、小型の机や腰掛けを点在させることで、街のスケールに寄り添った新たな居場所を生み出す。